

カレンダー

みずきあかね

カレンダー

カレンダーの4月は、桜だった。
薄青い空を覆い隠す薄紅の花霞。
うねる大木の根元に一人の男の子が眠るように横たわっていた。

これが私の探し人だと店主は言った。たしかに探している少年に酷似しているが、にわかには信じがたい。私を担ぐために描き加えたのだろうかとも思ったが、印刷物に描き加えられるだろうか。

それにしてもこの店に足を踏み入れてから妙な気分だ。街の裏通りに目立たないように存在するその店は、懐かしいような、怖いような。そう、たとえるなら真夏のお化け屋敷のようだった。全てが作り物のはずなのに、それを本物と信じさせるような妙な空気がある。気味悪くなり周りを見渡すと、天井まで続く黒ずんだ大きな棚の上に無数の人形が眩しさと忍び笑いを私の上に落とす。

「あら、あの子、もう帰らないって言っていたわよ」

「母親のことを随分悪く言っていたわ」

「ああいうふうにする子はきっと戻らない」

くすくす笑う人形達の言葉は微かだが辛辣だった。何故こいつらがしゃべるんだと思いもしたが、店主の柔らかな声はその思考を制した。

「すみませんね。彼女たちはあれでもあの子を心配しているんですよ。こらこら、邪魔をしてはいけないよ。こちらもお仕事でいらしているのだから」

店主は人形達をたしなめると、カウンターに広げられた4月のカレンダーを覗き込んだ。

「えっと、お探しの子.....篤志君でしたか、少々疲れているようでしたから、少し休ませてあげてはいかがですか？」

私には紙の中に入ってしまった人間を現実世界に戻す術などない。大体家出人を捜すだけの仕事なのにオカルトは困る。

「なんでもいいから、呼び戻してくれ」

「困りましたね。こちらの声は聞こえないんですよ」

腕を組みながら暫し考えていた店主は、ふと顔を上げ、私に微笑んだ。

「では、あなたが行って連れ戻してください。道は作りますから」

「.....はあ？ あんたが行けばいいじゃないか」

行くということは、この中に入れと？ この人は狐か狸.....いやいや。凄い技を持った魔術師かもしれない。

「私はこの店を空けられないんですよ。人形や剥製達が家出しても困りますからねえ」

背後からクスクスという笑い声や動物の鳴き声が聞こえた。気味が悪い。早く帰りたい。今日中に連れ戻せば謝礼は倍額という母親のにやけた顔が頭をよぎった。

「わかった。どうすれば？」

「では、靴を脱いで。カレンダーは土足厳禁ですから」

そして彼は私の靴と子どもの靴を袋に入れて手渡した。

「靴を履けば戻ります。12月を過ぎると帰れなくなりますからお気を付けて」

そうして店主は私の後ろに回り、背中をポン、と、押した。いきなりのことでバランスを崩したとたん目の前に満開の桜。カレンダーにぶつかるまいと踏ん張る！

次に目を開けたら.....どこかの丘の上。見上げれば満開の桜。はらはらと散り始めた桜の根元に抱かれるように男の子は眠っていた。胸ポケットから写真を出して、見比べる。たしかにこの子だ。ということは、私は本当にカレンダーの中に入ったのか？

「おい」

肩を揺さぶると、彼は小さく呻きながらうっすらと目を開けた。そしてきょとんとした表情で私の顔をのぞき込む。とたん警戒するように体を硬くすると桜の木にすがるように背を向けた。まあ、せっかく逃げ込んだところに大人が来たら警戒するのも当然か.....。

「篤志君だね。お母さんが心配しているよ。帰ろうか」

努めてにこやかに手を伸ばすと、少年は思いきり顔をしかめ、

「いやだ！」

そう言いながら、桜の木をするするとよじ登り、そのまま大きな枝に立ち上がると、天に両手を伸ばした。

「次の月へ！」

すると、辺りは一変した。

さわやかな風。ゆれる鯉のぼり。昭和30年代くらいの町並みの路地にいた。5月か。

その時、風の音にまじってカタカタという音が上から聞こえた。まさか.....私は路地から見上げた。人影が屋根と屋根の間を渡っていくのが見えた。服装から篤志君だということがわかる。篤志君の足音はどんどん遠のいていく。追いかけてはみたが路地は迷路のようで追いつけない。とにかく屋根の上に行かなくては。ゴミ箱を踏み台にして塀によじ登り、屋根に上がる。5月晴れの真っ青な空。黒い屋根瓦の波。こんな光景、ありえないと思いながら音がした方に歩いて行くと、大屋根の上で楽しげに鯉のぼりを眺める篤志君がいた。

「もういいかい？」

声をかけた瞬間、篤志君は慌てて両手を広げ、

「次の月へ！」

まわりはまたも一変した。

6月、雨に濡れる紫陽花の上にいるかたつむりをじっくりと観察し、7月、七夕飾りをはさみを駆使して作って、楽しそうに飾り付けをしているのに、私を見つけては

「次の月！」

いい加減にしてくれ！ と、思いながらもその後を追う。

8月は真夏の海。白い砂浜に蟹が遊び、青と黄の parasol が色を飾る。

彼は誰もいない砂浜に座って、遠く海を眺めていた。

声を掛けてもまた逃げるだけだ。だったら追わなければ.....。頭の中を巡る金額と篤志君の態度に焦りを感じながら、そっと近づいた。すると、篤志君がこっちを見て笑った。

「海ってきれいなんだね。でもちょっとクサイ」

その顔は、笑っているのに何処か苦しげで、私は捕まえようと伸ばした手を引っ込めなくてはならなかった。

「くさくないさ。これが海ってものだよ。来たことないのか？」

「全然！」

そう言いながら彼はぱっと立ち上がると、波打ち際に駆けだした。そして、寄せては返す波を追ったり追われたり。波の間を行き来する魚に目をこらしたり、ヤドカリを見つけて歓声を上げた。そして海水に足を浸して遠い目で水平線を見る。

「そろそろ帰ろうよ」

そのとたん、篤志君は体を強張らせ、両手を広げた。

「次の月へ！」

9月は、夜空にこれでもかと大きな月。そして、手元には綺麗に積み重ねられたお団子。花瓶に生けられたススキが銀色の光を放っていた。

私は篤志君の横に座り、一緒に大きな月を眺めた。今度は逃げないらしい。

「ねえ、おじさん。十五夜って、こういうのなの？」

そして一番上のお団子をぽいっと口の中に入れて、むしゃむしゃと音をたてながら食べた。私は頷いて答えた。

「ふうん。あんまりおいしくないや」

ごくんと飲み込むのと同時に篤志君は両手を広げ、

「次の月へ！」

10月の運動会で、彼はリレーの選手だった。

「よーいドン！」

子ども達がそれぞれ半周走ってバトンを渡していく。篤志君はアンカーだ。前の子がトラックを駆けてくるのを見て誘導されて並ぶ。ちょっと助走を付けてバトンを受け取ろうとしたが、失敗。土で汚れた赤いバトンを即座に拾うと、篤志君は思いきり駆けだした。あまり早いほうじゃない。後ろから選手が迫ってきた。私は思わず声を上げた。

「がんばれ！ 篤志君！！」

すると彼は思い切りスピードを上げそのまま走りきるとゴールテープを切った！

.....ああ。私も子どもの頃にテープを切りたかった。そこそこ足は速かったが、私はその瞬間を知らない。

「篤志君、がんばったな！ すごいぞ！」

土埃の舞う運動場を横切り、私は篤志君に駆け寄った。すると彼は大きく頷いて、

「やったぜ！」

って笑うと、右手に持つ「1」と書かれた旗を大きく掲げ、

「次の月！」

と、叫んだ。

11月は金色の銀杏並木。

ひんやりとした空気の中、篤志君は金色の葉を両手ですくい上げるとそれを自分の上空に振りまいた。

「雨だぞ！！」

その言葉に私は思わず葉を掻き集めると、思い切り上空に撒いた。ひらひらとそれはゆっくりと雨となり降り注いだ。

「おじさん！　すごい！　もっとやって！」

「よし！」

金色の雨が私たちの頭に肩に降り注ぐ。私と篤志君は、両手いっぱい金色の葉を掻き集めて振りまいた。篤志君は嬉しそうに叫んだ。

「次の月へ！」

向こう側にはこんもりと雪山が、その向こう側に美しい星空が広がっている。

静かな冬の夜。

足下を冷たく感じて、自分が靴を履いていないことに気が付いた。これだけ冷たいのだから、篤志君もさぞかし冷たいだろう。袋から靴を出して差し出した。

「靴を履くかい？」

彼は静かに首を横に振った。ゆっくりと吐く息は白く凍り、きらきらとした氷の粒になる。体に触るだろうと思い、自分の着ていた上着を彼の肩に掛けると、

「……僕さ」

ぽつりこぼした。

「いつも勉強ばかりで外になんて出たことないんだ。テレビもゲームも頭が悪くなるからダメだって。友達に貰ったストラップも携帯に付けてたらお母さんに取られちゃった。その友達は成績があまりよくなかったから付き合ったらダメなんだって」

受験勉強が嫌で家を飛び出した篤志君。

中学受験は再来年だが、今からかなりがんばらないと合格できないランクらしい。

母親は私に依頼する時、「必ず連れ戻して頂戴！」と、ヒステリックに叫んだ。私だってあの叫び声を毎日聞き続けていたら、カレンダーの中にでも隠れてしまいたいと思うだろう。

「桜の根元は気持ちよかったよ。海だって！　大きな月も見なかったしお団子も食べたことがなかった。運動会も本気で走ったら怪我をするからっていつもズルしてビリ。葉っぱなんて触ったら服が汚れるって怒られた。雪も……風邪をひいたら勉強に障るから」

両手に柔らかい雪を持つと、それを雪玉にしてちゃんと白い地面に置きながら、篤志君はまた寂しげに笑った。

私は何とも言えない気持ちだった。自分の子ども時代には当たり前のことを、この子はさせて貰ってないのだ。親のエゴで。

「篤志君は、将来の夢を持ってるかい？」

「将来の夢は、医者になることです」

しゃちほこ張った答えに、私はまたもや苦笑しなくてはならなかった。きつとずっとそう言うようにと、親に言われていたのだろう。

「なりなさいってお母さんに言われた？」

「う～ん、それもあるけど、僕もちょっとなってみたいかな」

篤志君はそう言いながら考え込むように腕組みをした。

「ならもっと他のことを知らなくては。お医者さんになるには勉強も大切だけど、もっといろんな事を知らないよね。それに体が丈夫でなくては。元気なお医者さんの方が患者さんも安心して診てもらえるってものだよ」

私は彼の手元にある雪玉を持ち、それに雪をぎゅうぎゅうと付けた。そしてほどほどに大きくしてから地面に転がした。

「なにしてるの？」

「雪だるまさ」

裸足に雪は冷たいと思っていたが慣れてきたらしくあまり気にならない。雪玉を転がしていくと、綺麗に丸く大きくなっていった。篤志君は興奮したように、

「すげえ！ すげえ！」

って自分も雪玉を固めて作り始めた。転がす度に雪玉は大きくなり、私の胸ほどにもなったその上に篤志君が大きくした雪玉を二人で重ねて、そのあたりにあった枝を折って手とし、石ころを目とした。雪だるまの完成だ。見上げる篤志君の頬は赤く、私も手と足がじんじんと痛かったが、素晴らしいできばえに大満足だった。

するとサンタクロースが乗るそりが上空を横切った。あと少しで一年が終わる。

「篤志君」

私は携帯電話を取り出し、とぼけた顔の犬のストラップを外して彼に差し出した。

「これ、あげるよ」

それを受け取りながら篤志君は私とそのストラップを見比べた。それは飲料水に付いていたおまけで、娘が「はい」ってくれたものだ。

「可愛いだろ？ これを持っていると勇気が湧いてくるんだ。だから、君も勇気を持ってお母さんとちゃんと話をしてごらん。真剣に話せば聞いてくれるよ」

「きっとダメだよ。いくら話しても勉強の邪魔になるからって」

「言う前から諦めるな。絶対大丈夫。こいつが君の味方をしてくれるから」

犬のストラップを受け取りながら、篤志君は複雑な顔をして笑った。

「……うん」

「よし。じゃあ、行こうか」

私は持っていた靴を目の前に並べると、

「さあ、いっせいのせ、で、履こう！」

と、急かした。除夜の鐘が鳴っている。タイムリミットだ。

「いっせいの」

「せ！」

二人で同時に靴を履いた……。

かちかちと時計の音が薄暗い店内に鳴り響く。どうやら戻ってきたらしい。

「おかえりなさい」

私の後ろで店主がにこにこ出迎えてくれた。上から、

「あら、戻ったの」

「お帰りなさい。少しは休めたかしら？」

「ホントお節介な大人よね」

辛辣な人形の出迎えに、私たちは苦笑した。

店主は手足がかじかんでしまった私たちに温かいお茶を入れてくれた。二人で手を温めながらそのお茶を頂いて、少しゆっくりしてから帰ろうと話し合った。

店主はあのカレンダーを丁寧に一枚一枚めくり、最後のページで手を止めて微笑み、私たちを手招いた。私たちは彼が指さす箇所をのぞき込み、

「ん？」

と、お互い顔を見合わせた。

十二月。

美しい雪の夜。

見覚えのある雪だるまが、こちらを見て笑っていた。

おしまい